武蔵野日曜聖書講筵

常に喜べ、絶えず祈れ、万事に感謝せよ、御霊を熄すな

――テサロニケ前書第5章16～28節――

１９８９年12月10日
小池辰雄

キリストに在るところの喜び　祈りと聖霊　祈り魂　永遠の生命の現実で祈る　霊の戦い　御霊から離れるな

【テサロニケ前5】

16常に喜べ、17絶えず祈れ、18凡てのこと感謝せよ、これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給う所なり。19御霊を熄すな、20預言を蔑すな、21凡てのこと試みて善きものを守り、22凡ての悪の類に遠ざかれ。

23願くは平和の神、みずから汝らを全く潔くし、汝らの霊と心と体とを全く守りて、我らの主イエス・キリストの来り給うとき責むべき所なからしめ給わん事を。24汝らを召したもう者は真実なれば、之を成し給うべし。

25兄弟よ、我らのために祈れ。

26きよき接吻をもて凡ての兄弟の安否を問え。27主によりて汝らに命ず、この書を凡ての兄弟に読み聞かせよ。

28願わくは主イエス・キリストの恩恵、なんじらと偕に在らんことを。

●キリストに在るところの喜び

テサロニケの手紙は、パウロが書いた最初の手紙です。第二次伝道の時に、テサロニケ教会にコリントから書き送ったものです。伝道先からよく書き送るんですね、ローマ書もそうです。あれは多分エペソで書いた。

著作集第十巻（『聖書は大ドラマである』１９８８年刊）の「12月13日　絶えず祈る、御霊を熄さない」（テサロニケ前書5・1～28）の項を読みます。

「常に喜べ。絶えず祈れ。万事に感謝せよ。これキリスト・イエスに在りて神の汝らに求め給ふところなり。御霊（の火）を熄すな。預言を蔑すな。……きよき接吻をもて凡ての兄弟に挨拶せよ。……願はくは主イエス・キリストの恩恵汝らと偕に在らんことを。」（テサロニケ前書5・16…28）

「このテサロニケ前書なる公の手紙は、第二次伝道の際、テサロニケ教会にコリント

から書き送ったもので、パウロ書翰の現存の最初のものである。４・13～18では特に再臨のキリストを希望しているので、いかに使徒たちはキリストを慕っていたことか。

右掲の短い数連の言は我々の日常生活へのパウロの勧めとして深く銘記すべきものである。「常に喜べ」、これは可能か。どんな不如意なときでも、常に喜び得るか。そのためにはキリストをわが衷に迎えて、天国をわが胸三寸の中に現ずることによって可能である。「絶えず祈れ」は、魂が祈りを呼吸とすることによって可能である。エン・クリスト！　キリストの中にいる態勢が、祈らざるを得ないようにする。祈りがたのしみとなる。祈りが力となる。そのとき不断の祈の魂となる。「万事に感謝せよ」、悲しいこと、口惜(くや)しいこと、憤慨に耐えぬこと、その他感謝できないようなときにも、魂をキリストに向けると、聖霊が臨み、あらゆる逆境に在って、逆に聖霊の力が強化されて感謝せざるを得なくなる。これが本当の勝利である。「御霊（の火）を熄すな」、魂の目をキリストに向けると、聖霊の火が燃える。聖霊の火は消えない。「預言」を受けるには祈りを要す。「きよき接吻」、主に在っての愛情は生命を若返らしめる。」

これは短い文章ですけれども、ポイントはちゃんと書いてある。誰でも、なかなか直ぐには喜べない。ということは、その事柄に対したら、喜べない。もし、喜んだら、それはある意味においては偽りになる。その事柄に対してではなくて、もうひとつ別な角度からその事柄を征服してしまう。その事柄を喜ぶのではなくて、その事柄がきっかけとなって、キリストに在るところの喜びというものが深くなり、高く大きくなる。これは本当です。個々のいろいろな事柄が私たちにぶつかってくるが、それにまともに同じ平面でもってぶつかっていたら、いつまでたってもゴタゴタしてしまう。別な次元に自分を入れるんです。別な次元に自分を入れて、キリストと一つになる。そうしたならば、それをきっかけに、

「私は本当の喜びに入りました。常に喜べますよ」

ということになる。これが

「常に喜べ」

です。「喜べ」なんて言ったって、喜べやしないです。

「パウロがそんな『喜べ』なんて言ったってダメだよ」

なんて。それは喜ぶわけにいかないよ。しかしながら、それを本当の喜びに変える――錬金術ではないけれども、魂の世界の霊的な錬金術だ――それができる。これはもう聖霊の世界だ。

●祈りと聖霊

だから、要するに大事なのは、

「祈る」

ということと、

「御霊を消すな」

ということなんだ。祈れば、御霊は消えない。御霊が消えない世界に入れば、本当の祈りができる。この祈りと聖霊は離すことができない。十字架と聖霊は離すことができないように。我々の体験の面からいうと、祈りと聖霊です。

「**熄（や）すな**」

という字は面白い字だね。火が息を止めるという字なんです。だから、消すという意味です。息を止めたら消えてしまう。

「**聖霊と火でバプテスマする**」

という、「聖霊と火」とは

「火なる聖霊」

と同じことなんです。聖霊は熱い。また、聖霊は水のように澄んでいる。滾々（こんこん）と湧き出づる。だから、火にもなるし、水にもなる。聖霊というのは面白いものだ。

「水火相容れず」

ではなく、「水火相容れて」しまうんだ。夏と冬が同じなんだ。夏も結構でございい、冬も結構でございい、

「聖霊がくるから風邪はひきませんよ」

と。正直、私は御霊を受けてから風邪をひかんものな。

結局、その御霊の世界になるためには、十字架のことになる。

「十字架を本当に受けとれ、そうしたらば、必ず聖霊は臨んでくる」

と。十字架で自分はすっとんでしまうんだからね。からっぽの所に聖霊が入ってくる。

「十字架は罪の贖い」

と言ってますね。「罪」というのは、私自身全体が罪なんだ、罪びとなんだ。それが贖われて、

「もうそんなことは心配いらん。お前はもう無者だ、無罪者だ。十字架で無罪者にしてやった。だから、そこには力を入れてやるぞ」

というのが聖霊の世界です。だから、十字架を本当に身体で受けとれば、必ず聖霊は臨んでくる。

こんなことは、しかし、無教会では私は有名な先生方からひとりも教わらなかった。自分で体験して知った。そうなんだよな、あなた方。私はたまにどっかでお話しすると、みんなびっくりするんだもの。

「そういうことでしたか。魂が目覚めました」

なんて言って。こないだの日本ペンクラブの人たちも、まぁ喜んだ。

あなた方はしょっちゅう、私から聞いているから、なにか少しマンネリズムになっている。だめだよ、マンネリズムになったら。本当のものは、日々に新たです。私は言いながら、自分がいつも新たにされているんだ。自分でこの本（第十巻）を読んでいて、いつもこれで

力をまた得るんだから。御飯は、

「今日食べましたから、明日は食べません」

ではないでしょ、しょっちゅう食べているでしょ。魂の世界もしょっちゅう、キリストの霊の生命を食べていかなくちゃ。

だから、何といっても、非常に大事な関門は「祈り」なんです。

●祈り魂

テサロニケ前5章です。

16 **常に喜べ、** 17 **絶えず祈れ、** 18 **凡てのこと感謝せよ、これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給う所なり。**

「常に祈っていなさい」とある。

「いつでも祈ります。祈らないではいられません」

ということです。「祈る」ということは、

「キリストとの交わりをする」

ということ。祈ることはキリストとの「信交」です。この信交の内容は祈りです。そして、交わるのだから、祈るのも本当は祈り入ると書く。「祈入」する。キリストに在れば、常にうれしい。笑っている。「常に喜んで」いる。

「絶えず祈れ」

とあるが、

「絶えず祈ります。祈らなければ、キリストとの交わりがなかったら、力がありません、生命がありません。『我れキリストのうちに、キリスト我がうちに』と、私の中にはキリストがいますよ。私自身はどうであろうと、そんなことは関係ありません」

ということです。

「もっと聖書を勉強しなければ、もっと何々しなければ、キリストは入ってこない」

なんて、そうじゃない。ダメなところに入ってくるんだ、キリストは。ダメなところに本当に入ってらっしゃるんです。病める者を救わんとした。

「健やかな者には医者は要らない」

と。ところが、本当に「健やかな者」なんかは居やしない。

祈らざるを得ません、電車の中でもどこででも。なにも、「祈り三昧」ということではないですよ、

「祈り魂」

ということです。

まぁ、福音書のキリストの言葉や業を見ていると、本当の驚くべきものだからね、もう

本当にケタ違いだから。あなた方はそう思わないですか。

「ケタ違いで、もぅ参りました」

と。それだから、キリストに飛び込んでいかなくちゃ。遠慮はいらない。

「ダメだから、来い」

と仰る。

「ダメだから、集会に来なさい」

と私は言うんです。

「調子が悪いから、今日はスランプだから、敷居が高いから、集会に行かない」

なんて、何を言っているか。ここは敷居が一番低いんだ。どん底なんだ、ここは。

パウロさんに言ってやるんだ、

「『常に喜べ』だと？　もう喜んでいますよ」

と。事柄を喜ぶんじゃない。事柄にぶつかっては、それを契機として本当の喜びの世界に入るということです。

死ぬか生きるかの病気の人をもっていて、それで喜ぶわけにはいかないんだ。けれども、それを契機にして、本当の喜びに入ると、今度はだんだん、病人の方が喜ぶようになっていく。

●永遠の生命の現実で祈る

今朝は、ＮＨＫのテレビで坊さんとお医者さんとが話していた。

「医者の世界も宗教がいるの云々」

と。言っていることはある程度ごもっともだけれども、ダメだよ、あれでは本当の力は来ない。やっぱり福音でなければダメだと思うね、あの話を聞いていても。全く情けない。誰か知っている人があったら、一遍、私はテレビでやりたいよ、本当に。

こないだ、Ｓ姉さんを見舞いに行った。Ｓさんは両方の鼻に管を入れて、24時間、眠っている間も酸素吸入して、点滴をしている。それでも、彼女は本当に明るいんだ。そして、

「こういう人に私は第十巻を送りたいのですが、先生、よろしく」

なんて、人のことを一生懸命で考えている。それから、私は祈った。

「Ｓさんは、鼻は酸素を吸っていますが、魂はあなたを吸っています。だから、あなたが本当にＳさんをいよいよ強くしてください」

と。「吸いなさい」とは言わない。

「吸っています。魂はあなたを呼吸しています」

と言う。聖霊の、キリストの霊を吸っている。これは普通の健康者よりかもっと凄いんだ。あそこでもそうだよ。岡山のＩ君のお母さんの所に私は出かけて行った。病室は面会謝絶でも、

「私はキリストの使いだから入ります」

と私は入って行った。そして、お母さんの手をしっかり握って――いい魂だからね――永遠の生命の現実で祈った。

「治してください」

ではない。もう癌の相当の所ですから、そんなことは祈らない。永遠の生命の現実で祈った。もう彼女と永遠の生命の勝利をいただきながら祈った。本当に喜んでね、私はあの笑顔を忘れることができない。

だから、キリストに在っては常に勝てるんです。どんな情況にあっても、勝てるんです。相手がどんな者であろうと、大丈夫です。相手がお気の毒になるだけのはなし。もぅ、ありがたくてしょうがないね。だから、

「万事に感謝せよ」

だ。自然に感謝が出てくる。いろんな事にでっくわせば、逆に聖霊がはたらきたもうから、感謝せざるを得ない。

結局、喜びも感謝も、何もかも、これは全部、キリスト・聖霊の世界なんです。それでなかったら、情況によってうれしくなったり、悲しくなったりする。人間的にはそういう感情はあるよ。けれども、そのもうひとつ別な次元に入っちゃうからね、それに打ち勝てる。そうすると、力が来る。全存在的に力がくる。

●霊の戦い

同級会なんかをしても、もう残れる者はほんのわずかです。しかも、その残れる者は情けない話ばっかりしている。こないだも電話がかかってきて、

「やっぱり、どうも小池さんは神さまがついているから、一番終わりまで生き残るね」

なんて言っていたそうだ。

「それでは、君たちも神さまがつくような人になってくれ」

と言いたいんだ。

十二召団の方々が、人間関係でゴタゴタするようなことはひとつもないですよ。キリストと一つになれば、自然にお互いに尊敬しあい、お互いに助け合い、喜びを共にすることが、自然にそうなる。自然にそうならなかったら、本ものではないんだ。本ものなら、必ずそうなる。

26 **きよき接吻をもて凡ての兄弟の安否を問え。** 27 **主によりて汝らに命ず、この書を凡ての兄弟に読み聞かせよ。**

28 **願わくは主イエス・キリストの恩恵（めぐみ）、なんじらと偕に在らんことを。**

「きよき接吻」というのは、これはまぁ、ヨーロッパの人たちのことだ。

「汝らと偕に在らんことを」

ここのところはちょっとパウロさんも、

「汝らの中に在らんことを」

と、なぜ言わないかと思う。

私にはまだ使命があるから、私は死にませんよ。まだ10年やそこらは戦いますから。キリストの生命が、聖霊の生命がどんなに凄いかを実証してやる。私は戦争そのものはもちろん好きではないけれども、そういう意味で、霊の戦いの世界です。キリストもサタンと戦われて、勝ちたもうた。

「我、すでに世に勝てり」

と仰った。サタンに勝った。「世」というのは、サタンの支配している世ということです。

「汝ら、雄々しかれ」

という。

「あなたの中に入れば、雄々しかざるを得ません」

ということです。男であろうと女であろうと、全部これは勇士であります。勇士でなかったら、本当に担うことができない。敵を助けることができない。聖霊の勇士です。それがまた本当の愛だから。

一般的には、女性は愛で、男性は義の世界だね。けれども、男性も女性も本当のところでは一つなんです。それは、

「本当の人間である」

ということです。あのクラーク先生は、

「学校で規則は一つも要らん。ただ、紳士であれ（ビー　ジェントルマン）」

と言った。これは、私は本当に名言だと思うね。

「ビー　ジェントルマンで、他に規則は要らん。自分で判断しろ。ジェントルマンらしく行動せよ」

という。「ジェントルマン」というのはもとは「優しい人」という意味だね。

●御霊から離れるな

「御霊を熄すな」

とある。「熄すな」なんて言っても、御霊は、本当に御霊なら消えないんです。

「パウロさん、本当の御霊はどんなことがあっても消えませんよ」

と言わなくちゃ。「消すな」じゃないんだ。御霊は、どんな嵐が来たって、消えません。永遠の炎です、永遠の火です。「御霊を熄すな」ではなくて、

「御霊から離れるな」

なんだよ、自分が御霊から消えているわけだ。御霊は消えないものなんだ。本当は、

「御霊をなくすな」

ということだ。御霊それ自身は消えない。「御霊を消すな」というと、何か、こっちの信仰が御霊を消すような、そういう角度からこれを取ったらだめだよ。

パウロの言葉でも、ヘタすると、本当の取り方をしそこなう。キリストの言葉でも、ヘタすると、とりそこなう。もうひとつ奥をちゃんと見ないとね。

だから、私は本当はいつか時間があったら、大胆な新約聖書をつくりたいくらいだよ。いわゆる訳ではないんだ。本当のところをつかえまた新約聖書を。何と言ったらいいかな……これは何とも言えないな。それを読んでいたら、力がくるような。いや、聖書だってそうなんだけれどもさ。ありがたいね、この聖霊の世界は。ちゃんとそこが見えてくるから。響きが、歌の奥の霊歌的なものが聞こえてくる。

歌も霊歌的な質になっていかなくては、本当じゃない。サタンはそういう歌は嫌いなんだ。サタンは逃げていっちゃう。讃美歌を本当に魂で、御霊で歌えば、サタンは逃げていく。讃美歌は、讃美することは、祈りのまた別のひとつの姿だから、心をこめて歌いなさい。私はよく独りでドイツ語の讃美歌をくちずさんで、知らない間にだんだん覚えてしまう。それで、パウロのこういう言葉が楽しくなるんです。

「へぇー、そうですか。常に喜べだ？　絶えず祈れだ？　万事に感謝せよだ？　むずかしいなぁ」

なんて思っているのは、いわゆる儀文にとらわれている。ちっともむずかしくない。

「パウロさん、何言っているか。私はうれしくてしょうがないんだ。祈らないじゃいられないんだ。すべてのことをきっかけにして神さまに感謝していますよ」

と言ってやる。事柄それ自身に感謝するのではないですよ、事柄それ自身を喜ぶのでもない。

「この野郎！」

と思ったら、「この野郎」でいいんだよ。その先を、その奥の世界を持つことです。

「何をぬかすか！」

でいいんだよ、私は江戸っ子だから。その先の、その奥の世界で、

「お前なんか相手にならんぞ」

という現実をもつこと。本当ですよ、これ。虚勢を張っているわけじゃない。どうぞ、男の方でも女の方でも、そういうところを持ってください。

もう少し、お爺ちゃんの話を聞くといいんだけれどもね、うちのものは。

「お爺ちゃんはおっかない」

なんて。私はちっともおっかなくないんだよ。